【論　文】

「島村蟹」の伝承についての考察

島　村　　豊

はじめに

恨みを持って死んでいった人間が、他の動植物に姿を変えたという伝承は少なくない。その中でも蟹の甲羅に鬼面となって再生したという話は平家蟹が有名だが、今回は「島村蟹」を取り上げて考察してみたい。

享禄三～四年(一五三〇～三一)に、細川高国[1]と浦上村宗[2]連合軍対細川晴元[3]と三好元長[4]連合軍の、足利将軍家と管領細川家を二分する戦いが、東播磨から堺にかけて、摂津国を中心とした広い地域で展開された。享録四年六月四日、中津川(旧淀川)河口付近から大物浦沿岸の尼崎に跨る地域で、両細川家の雌雄を決する合戦が行われた。当時の海岸線は現在より内陸部の尼崎・大物の近くに有り、沖合を大物浦と云った。この合戦で細川高国と浦上村宗の連合軍は大敗北を喫し、故にこの合戦を「大物崩れ」という。

図１　中世淀川流域の津（尼崎市立地域研究史料館『web版図説尼崎の歴史』より筆者が加工加筆した。）

播磨国置塩城に赤松政村[5]がいて、政村の父赤松義村[6]は播磨・備前・美作の守護職であった。浦上村宗は赤松家筆頭重臣で赤松家内を差配する立場にあり、村宗は義村を弑殺し、幼少の政村を操り人形の守護職に据えた。政村は成人し親の仇を討つ機会を狙っていて、敵意を隠して高国と村宗の援軍と称して出陣した。政村は前もって密かに晴元側に味方する事を約していて、高国・村宗側を背後から急襲した。その時村宗軍の中から政村軍へと鞍替えする者も多く、又それに呼応して晴元・元長軍が討ちかかり、そのため細川高国・浦上村宗方は大敗北を喫し死者七千人、死体で野里川(中津川、当時の淀川河口の支流)に塚が出来た様になった。(『細川両家記』[7])その時に奮戦し、敵と一緒に野里川に飛込んで死んだ島村弾正左衛門貴則がいて、後にその辺りで獲れる蟹の甲羅が鬼面なので、それを「島村蟹」と地元で言い伝えられた。しかし、「島村蟹」に「浦上村宗家臣」説と「細川高国家臣」説があり、そこで「島村蟹」は何処の誰で、何時頃から、どの様にして言われ出して定着したのかに注目して、調査・確認しようと考えた。

昨今のインターネット上での「島村蟹」の情報は玉石混合で、面白おかしく書かれていたり、江戸時代の巷談奇談を真に受けて、いかにもその話が本当の様に信じたり、事実を曲げた内容が多く見られる。そして間違った情報が知らない間に流布され、定着していく事に、危惧の念を感じざるを得ない。

この調査を行うに当り、先行研究として愛知学院大学文学部日本文化学科の蛸島直氏の論文『蟹に化した人間たち(1)』[8]があり、それを参考引用させていただいた。史料については必要な箇所のみを抜粋引用し、「しまむら」は「島むら」、「嶋村」、「嶌村」と記述があるが、史料以外は「島村」

に統一して表記し、人名や年号等の説明が必要と思った箇所には筆者が（　）内に書き加えた。

一　島村蟹の起源（十六世紀末迄）

「大物崩れ」に関する記事をみると、初見は室町時代の公家鷲尾隆康の日記『二水記』[9]等に書かれている。ここでは合戦直後の風聞状況を書き記しているが、「島村蟹」は現れていない。以下『二水記』を日毎に、日記と要約を併記する。

（享禄四年六月）四日

菴説云、没水死者不知其数、今度数千人死、上古猶不問云ゝ、

天王寺常桓陣今日敗軍、数千人討死、大略没水云ゝ、言語道断之次第也、抑敗軍之子細ニ者、赤松与堺令同意、浦上掃部頭依為親敵此次可撃之由計之處、己以露顕、仍軍中不調之處、今日従堺四国衆攻来、赤松其外明石等従軍中直棚切懸之間、常桓・浦上等雖為数千人敗北了云ゝ、赤松心中不足(言脱ヵ)之由世皆称之云ゝ、

八千人計死去、於堺實検首五百云ゝ、

（要約）

巷の話では水死者数知れず、この度は数千人死んだという、このような事は昔から聞いた事が無いと言っている。

天王寺の細川高国は今日負けて数千人討死をした。殆ど水中に没したという、とんでもない事だ。そもそも敗軍の子細は、赤松政村が堺の細川晴元に味方する事に同意した。政村は親（赤松義村）の仇となる浦上村宗を何時か討つ事を考えていたが、既に裏切る事が露見して（家臣達の中で村宗方から政村方へ鞍替えする者がいて）浦上軍の中が混乱していた所へ、今日堺（細川晴元）と四国衆（三好元長）が攻めて来て、赤松政村や明石（長行）等が直ちに切掛り、細川高国・浦上村宗等数千人が敗北したと伝えられる。政村の心中は、これでも足りないと思っていると世間の人は皆言っている。八千人が討死をして、堺で五百の首実検（侍大将クラス）をしたという。

五日

四日　午後風聞云、摂州之儀、常桓敗軍几落居云ゝ、言語道断之儀也、於今度者可達本意条無其疑之處、赤松与堺同意、仍不日如此敗北了云ゝ、天下弥無可頼事、不足言事也、但實否未定也、如何ゝゝ、

（要約）

四日（昨日）午後噂を聞いた。摂州の件、細川高国敗北して逃げ出したそうだ。とんでもない事だ。今度の事（高国は合戦に勝利して）で自分の思いを達するはずであって、それを信じて疑ってもいなかった所、政村が細川高国・浦上村宗を裏切る事を細川晴元と同意したため、すぐにこの様に敗北してしまったと云う。天下でいよいよ頼むべき人（著者の鷲尾隆康にとって）がいなくなってしまった。言葉にならない。但し、まだ本当の所は分らない。いかがなものだろうか。

八日

常桓今暁於尼崎京屋切腹云々、不便言語道断之儀也、運命至極之故欤、只一人切腹、被官一人無之云々、無念之次第欤、三好山城令妨(ママ)云ゝ、

（中略）浦上掃部頭涯分運武略之處、如此不思儀出来、是又不便之題目也、入水死去云々、多分為實説欤、尚以不便之事也、嶋村令討死云ゝ、子者打死、親者没水云ゝ、

（要約）

高国は今日の暁方尼崎の京屋に於いて切腹したそうだ。不憫でとんでもない事だ。運命が極まった。家来の一人もいなくて只一人で切腹したらしい。無念である。介錯は三好山城守一秀がしたそうだ。（中略）浦上掃部頭は精一杯武略で戦ったが、いかにも思わぬ事が起き、これ又残念な事だ。入水で死去したそうだが、多分実際の事だろう。尚、残念な事に島村（貴則）も討死してしまったそうだ。（島村の）息子は討死して、親（貴則）は水死だという。

同じく公家の三条西実隆の記した日記『実隆公記』[10]には六月五日以後数

日にわたって、細川高国が敗戦した風聞が記されているが、浦上村宗や島村貴則に関する記事は無い。又、『尚道公記』[11]では浦上(村宗)の名は見えるが島村は出てこない。(当然島村蟹の記事は無い)

次に「大物崩れ」から約二〇年経過した後の記録である『細川両家記』[7]は次のように記している。

常桓方和泉守護殿。伊丹兵庫助國扶。河原林日向守。薬師寺三郎左衛門。波々伯兵庫介討死也。この外中嶋の野里川へ入て死する也。同播磨衆に浦上掃部。嶋村弾正初て三百餘人討死也。此外五千餘人野里川へ入て水におぼれて死也。以上七千餘人死すると言うなり。誠に〳〵川を死人にてうめて。あたかも塚のごとく見ゆる。昔も今も末代もかかるためしはよもあらじと人々申也。

ここではまだ「島村蟹」は現れていない。又、島村は播磨衆で高国家臣ではない。

初めて、「島村蟹」の記述が現れるのは、「大物崩れ」から約半世紀が経過した安土桃山時代に書かれた軍記物『足利季世記』[12]である。

浦上掃部助討死ス同手ノ島村弾正ハ無念ナリトテ敵ト引組テ野里川ニ飛入テ死ケルカ其淵ヨリ武者ノ顔甲ニアル蛾(蟹カ)出来テ今有リ所ノモノハ島村蛾(蟹)ト是ヲ云

ここで初めて「島村蟹」が登場したが、島村と一緒に討死した敵の名前も人数も明らかでは無く、島村は浦上掃部助同手の「島村弾正」である。

天正の頃(十六世紀末頃)成立したと推察される『赤松盛衰記』[13]巻之下にも「島村蟹」が登場する。

浦上村宗真先に討死す。一族島村弾正忠といふ者、敵数多討取けれども、精力尽果て引退く事も叶い難く、終に敵と引組んで、野里川へ飛入、水に溺れ死けるを、其此皆人褒合けり。ふしぎや夫よりして、此野里川に武者の顔の甲にある蟹、数多出て今の世までも有けるを、此所の者ども弾正が霊魂なりとて島村蟹と付たり。

ここでも「島村蟹」と記されていて、飛込んだ人数も台詞も名前もないが、浦上村宗の一族となっている。

合戦後約半世紀が経過して記録上初めて「島村蟹」が登場し、十六世紀の史料や記録では「島村蟹」は浦上村宗家臣の「島村弾正貴則」で、細川高国の家臣とは書かれてはいない。

二　島村蟹の広がり(十七世紀)

関ヶ原の合戦(一六〇〇年)、大阪冬・夏の陣(一六一四・五年)を経て、島原の乱(一六三七・八年)、由比小雪の慶安事件(一六五一年)、明暦の大火(一六五七年)等々の大事件を経過し、世情も徐々に安定し娯楽を求めるようになり、一七世紀末には元禄文化が花開いた。その時『太平記』等の軍記物が講談等で広がり人気を博し、「太平記読み」[14]が登場して、徳川幕府や諸大名及び大衆に支持されて浸透し、『後太平記』[15](一六七七年)『続太平記』(一六八六年)『前太平記』(一六九二年頃?)『前々太平記』(一七一五年)等が続々と刊行された。

『後太平記』で始めて「島村」は浦上家臣では無く、細川高国の家臣で、「強弓の兵(つわもの)で天下に隠れ無き精兵となり、敵二人左右の脇に挟んで川水に飛んで入る」となっている。『後太平記』[15]には次のように記されている。

高国入道戦ひ労れ、討たるゝ者幾く数を知らず、茲に執事の内にて日比芳恩も他に異なる兵島村弾正左衛門貴則は、血気萬人に勝れ、強弓を引いて、天下に隠なき精兵なれば、此時一矢仕らんと訇って、東方に罄へたる佐々木六角が魚鱗に進む勢の中へ、笛竹に劣らぬ大箭百計り射掛けたれば、馬にも人にも弛れず、一箭に五人三人射透され、是は如何なる魔醯修羅王の放つ矢かと、舌を扣き身震して群々と逃げ散ず、(中略)執事(高国)に屬慕ふ者とては伯加部左衛門次郎、高田五郎、香東山城守、島村弾正左衛門唯四人、最後の威儀を調へ、己に自害に望んで漂走る所へ敵亦大勢追ひ来れば、四人の郎従一防ぎ繋留めて、心静かに自殺を進めばやと、取って返して防矢射る、され共敵透

間なく推し寄せ来れば、片時の命を保たんため大甕の内に隠れて坐しけるに、敵是を捜し出し、情なくも刺殺し、首取つて差上げたれば、残る四人も悉く討たれにけり、中にも島村弾正左衛門貴則は荒々無念の最後よと敵二人左右の脇に挟んで川水に飛んで入る。哀れと云うも疎なり、貴則が亡魂軈て蟹と化して、今の世までも名を水底に留めて、七手八脚嗔れる身とぞ成りにける。

一の島村蟹の起源（十六世紀末迄）」、『二水記』の八日の条で見たように、細川高国は六月八日に切腹をするのだが、ここでは敵に見つかった直後に刺殺され首を打たれて、それを知った島村弾正貴則は「荒々無念の最後よ」と言って敵二人と入水した事になっている。合戦日は四日で、八日では緊張感が保てず、当然戦闘は終っており、周りに一緒に入水する敵がいないからであろう。そして、強弓は「馬にも人にも弛れず、一箭に五人三人射透され云々」とあり、当時の定番で、軍記物独特のオーバーな表現である。又、この『後太平記』に登場する佐々木六角氏は、実際には高国方に与していて、細川氏、浦上氏どちらの家臣の島村氏であっても、味方である佐々木六角氏に弓を射る事は有り得ない。そしてこの時、近江守護六角定頼は近江で将軍義晴の傍にいて、この合戦には参陣していない。[16]

この様に『後太平記』に限らず軍記物は、分り易さや大衆受けを優先していて、史実の誤認も多々認められる。

元禄五年（一六九二）浅井了意の仮名草子『狗張子』[17]が刊行され、多数の怪奇譚が収められている。第一巻五に「島村蟹のこと」がある。

細川高国の家臣島村左馬助は、武扁を心にかけし者なり、わづかなる過ちありて殺されたり。亡魂すでに蟹となり、摂州尼が崎に多くわきいでたり。世に島村蟹と名づく。よその蟹よりはちいさくして表のかたに皺多く見ゆ。さらばにや顔の皺みたる人を、島村蟹のようにといえるは、このことなりとかや。

この『狗張子』では島村は細川高国の家臣で、名は「左馬助」となり、わずかなあやまちで死んだので、合戦で死んだのでは無いことになっている。又顔に皺の多い人の事を「島村蟹」のようだと、人相の表現として用いられている。

『摂陽群談』[18]の城郭の部には次の様にある。

島村左馬助戦場

同郡中津川を指せり。享録年中の戦場、島村敵二人を両脇に挟んで、河底に沈没す。此川岸の蟹の甲、皆鬼面を生ず。是即左馬助が勢ひ也とて、世に島村蟹と云傳へり。『将軍家譜』・『後太平記』等に詳なり。左馬助は、細川高国家人也。

又、名物土産の部には「島村蟹」の項目がある。

同郡野里村の川面に多し、此蟹の甲人の怒る面あり、細川高国家人島村左馬助、享禄年中、此川面に於いて戦死、其怨念を留ると云ひ、と記している。ここでは「『将軍家譜』・『後太平記』等に詳なり」と記してあり、名は左馬助なので『後太平記』『狗張子』が底本になっていると理解できる。なお、『将軍家譜』では高国敗死の記載があるが、「島村蟹」の記載は無い。

『本朝食鑑』[19]の「島村蟹」の項目で下記の様に記述されている。

近時、摂州の尼崎・天王寺の前の海浜で大蟹が採れるという。腹の文（もよう）が人面のようであって、嶋村蟹と呼ぶ。後奈良帝の享禄四年に、細川高国が三好氏（海雲元長）と尼崎・天王寺の辺で戦って負死した折、高国の党であった嶋村某（貴則）は、膂力人に勝れており、敵二人を脇に挟んで水中に没した。その霊が蟹に化したのを、土地の人は嶋村蟹と名づけたものである。この蟹は蟷蜂の類である。（蟷蜂はワタリガニ科のガザミの事）

ここでも細川高国の家臣で、敵二人を両脇に挟んで入水したとあり、ガザミは鉗脚（ハサミ脚）が長く強靭で「膂力」が目立つ。そこに敵兵二人を左右の脇に挟むという島村貴則のイメージが重なるともいえよう。

以上見て来た様に十七世紀後半にかけて、軍記物で『後太平記』、奇談で『狗張子』、動植物で食や医に関する薬物学の本草物で『本朝食鑑』、地

誌で『摂州群談』等が相次いで刊行され、これらの中に「島村蟹」が取り上げられている。そして、講談や浮世草子等で広められて、「島村蟹」の「島村」は細川高国の臣で、敵二人を左右の脇に挟んで入水したという話が定着していったのであろう。

三　島村蟹の広がり（十八世紀以後）

十七世紀末頃から元禄文化が花開き、庶民の娯楽も講談、浄瑠璃、浮世草子、浮世絵等々大きく膨らみ、又軍記物や本草学及び地誌も大いに発展していった。地方の諸藩でも地方史として軍記物や地誌類も多く書かれた。例えば毛利家には『西国太平記』『陰徳太平記』[20]がある。「島村蟹」は『西国太平記』[21]には記載は無く、『陰徳太平記』に登場するが、原典の『陰徳記』[22]には無い。『陰徳太平記』の記述は以下の通りである。

同（享禄四）六月四日三好勢先陣として、天王寺、木津、今宮へ押寄せ、火水に成て攻戦ふ、天王寺にも、和泉の守護（細川元有）、其外、伊丹兵庫助国扶、河原林日向守、薬師寺三郎左衛門、波々伯部兵庫助、南条紀伊守、香西越後守、嶋村弾正左衛門等、打出々々防戦しける間、（中略）常桓（高国）の手に波々伯部左衛門次郎、高田五郎、香東山城守、嶋村弾正左衛門等、返し合せて防戦する其隙に、常桓は尼が崎へ落行、買人京屋と云者の処に、隠れて居られけるを、山城守聞付、頓て押寄ければ、常桓自殺の期を外して、瓶の中に入て居られしを、遂に探し出し、此由境（晴元）の陣へ注進しけるに、自害させ可申由、下知せられける間、同八日の朝、大物の広徳寺にて切腹をぞ進めける。（中略）（常桓は）其後行水して、腹十文字に切てぞ伏られける、付従たる家人波々伯部等の者共、皆討死したりけるが、中にも、嶋村貴則はかゝる有様口惜き次第哉と、歯を切て立てけるが、敵二人を引よせ、左右の腋にかい挟んで、汝迷（冥）途の供せよと云もあへず、河水に飛入てぞ死にける、後貴則が亡霊、化して蟹となる世に嶋村蟹とぞ唱えける。

これは『後太平記』を下敷きにしている様に思えるが、高国は刺殺ではなく、六月八日朝に切腹をしていると書かれていて、『二水記』『細川両家記』や『足利季世記』等の史料を調べているようにうかがえる。そうであれば、前述のように「島村蟹」は「浦上家臣」であると理解している筈であるが、何か意図があり「細川家臣」にしているではないかと疑われる。又、「島村貴則はかゝる有様口惜次第哉と、歯を切て立てけるが」と記してあるが、「かゝる有様」が切腹を指しているのなら、『後太平記』の所で述べたように話がおかしくなってくる。また、ここで初めて「冥途の供」と書いてある。

一方十八世紀後半、備前岡山藩士の土肥経平が著した備前地方の『備前軍記』[23]では「島村蟹」の島村弾正左衛門貴則は浦上村宗家臣となっていて、敵二人の名前「佐田岡平治・吉村十郎」が初めて登場し、ここでも「冥途の供」が出てくる。

浦上とゝもに天王寺にて討死せし備前侍のなかにも、（中略）島村弾正左衛門貴則も、村宗をはじめ備前勢数を盡して被討しを口惜く思ひ、歯がみをなして立たる所へ、佐田岡平治・吉村十郎といふ敵二人討てかゝるを飛かゝり、取て引寄左右の脇にかい挟て、汝迷途の供せよと言て野里川へ飛込死にけり。此島村貴則が亡霊化して蟹となりしといふ。げにも其時より其所に人面のごとき蟹出来ける。今に其摂州野里川にて島村蟹といふて有るは是なり。

著者の土肥経平はこの「島村蟹」の場面以外でも、様々な文献や記録を比較考証して、年次の比定以外では、ある程度史実を踏まえて著作していると思われる。

播磨地方の地誌『播磨鑑』[24]の揖東郡「島村城」の項に、島村弾正左ヱ門貴則は「浦上ノ臣」と記されている。

島村弾正左衛門貴則浦上ノ臣攝州野里合戦ニ打負海ニ没シテ其霊蟹ト成ルト　世ニ島村蟹ト云是ナリトソ

儒学者として知られる貝原益軒が十八世紀初頭に著した『大和本草附録

巻二(介類)』[25]には次の様に記されている。

島村蟹ハ鬼蟹也享禄四年備前ノ浦上掃部助村雲(ママ)。細川右京太夫晴元ト於摂津合戦シ於尼崎打負自殺　浦上ガ臣島村弾正左衛門貴則敵ノ強兵両人ヲ左右ノ脇ニハサミ水ニ入テ共ニ死ス尼崎ノアタリ野里川ト云所ナリ其霊蟹ト成シトテ島村蟹ト云怒レル人ノ面ノゴトシ　一説細川高国カ臣ト云ハ誤ナリト云

著者の貝原益軒は『備前軍記』の著者土肥経平同様に、文献や記録に目を通じ、考証を重ねていると思われる。益軒は「島村弾正左衛門貴則」は浦上家臣で、細川高国家臣というのは誤りだと言っている。

しかし『大和本草』を底本にしたと思われる『広益俗説弁』[26]以後の著作物では、『重編応仁記』[27]、『備前軍記』、『播磨鑑』を除いて、管見の限りでは「浦上家臣島村」は姿を消し、「細川高国家臣島村貴則」となっている。

『広益俗説弁』[26]には次のように記している。

俗説云、享録四年、細川晴元と浦上掃部介と、摂州尼が崎においい合戦す。浦上、敗北に及べるとき、浦上が家臣島村弾正左衛門貴則、敵二人を左右の脇にはさんで、河に入て死す。其たましひ忽蟹となる。島村蟹となって、蟹の甲に人の恐れる顔あり。

『重編応仁記』[27]には次のようにあり、『赤松盛衰記』を底本にしていると思われる。

浦上掃部助村宗マツ先ニ討死ス一族ノ島村弾正ト云者敵数多討取ケレ共精力盡果テ引退事モ叶難ク終ニ敵ト引組テ野里川ヱ飛入リ水ニ溺レ死ケルヲ其此皆人褒合ケリ不思議也其レヨリシテ此野里川ニ武者ノ顔ノ甲ニ有ル蟹数多出来テ今ノ世迄モ有ケルヲ此所ノ者共弾正ガ霊魂也トテ島村蟹ト名ヲ付タリ

右記の『大和本草』から百年以上経過した、天保二年～弘化四年(一八三一～一八四七)にかけて刊行された、滝沢馬琴の『新編金瓶梅』[28]に島村弾正貴則が次のように登場する。

高国の寵臣なりける嶋村弾正貴則は手勢　僅かに五百余りを従へて(中略)貴則も又　痛手に得耐へず今はかうよと思ひしかば　浦辺にありける碇を担ぎて　海へ　ざんぶと飛び入りて　底の水屑になりにける　さらば嶋村貴則が怨霊は遂に　その浦の蟹となりて　そのお甲に人の面あり　その形　屋島　壇の浦なる平家蟹と相似たり　世にこれを嶋村蟹と呼びなしたる　是その事の元なりけり

島村弾正貴則は管領細川高国の寵臣の役人である。第八輯の大物の浦での合戦では、碇を担いで海に飛込み、蟹と化したとある。『新編金瓶梅』は、当時の人気作家の滝沢馬琴が一五年以上かけた長編の大作である。それに細川高国の寵臣として登場すれば、大衆は「島村蟹」は細川高国の臣の島村貴則と信じて疑う事もしなくなってしまったであろう。

次に前記以外の「細川高国家臣島村」と記述されている出版物を、発行年代順に記す。

『和漢三才図会』[29]のうち「鬼蟹(たけぶんがに　しまむらがに)」の項に次のように記されている。

(俗に武文蟹という。小さいものを島村蟹という)

享禄四年(一五三一)、細川高国は三好氏と摂陽で戦った。細川の家臣の島村何某というものが、そのとき敵二人を脇に抱き尼崎の水中に没した。それで尼崎の浦では小鬼鬣を俗に島村蟹と呼ぶ。

次に『斎諧俗談』[30]右記の『和漢三才図会』を底本にしていると思われ、「鬼蟹(たけぶんがに)」の項に次のように記されている。

享禄四年、細川高国、三好と摂津国にて戦ふ。細川が家臣島村何某というもの、敵二人を脇挟で、尼が崎の水中に没死す。かるがゆへに尼が崎の浦の小鬼鬣を、俗に島村蟹といふ。

『奇談一笑』[31]の「嶋村蟹」の項に次のように記されている。

古者細川高国城二摂之尼崎一居レ之、麾下有二島村貴久(ママ)ト云者一為二一時梟将一後、及二高国敗時一貴久擐レ甲没レ海、遂化為レ蟹、介上類二人面一、状甚獰悪、其種繁衍、至レ今名レ之為二島村蟹一、世俗門掛二其殻一以為二壓勝一、今京師婦女見二人蹙レ頞者一目レ之為二島村蟹一即是

（要約）

古の者細川高国は摂津の尼崎に城を構えて居た。この配下に島村貴久という者がいた。一時の梟将で、高国が敗れた時貴久は鎧を付けたまま海に没して遂に蟹となった。蟹の甲が人面に似て、はなはだ恐ろしげで、その種が大いに繁殖し今に至る。これを島村蟹と言う。世間では門にこの殻を掛けて魔除(圧勝)とした。今京の婦女達が、額が縮んで狭い額の者を見て、島村蟹と為すと言う。即ち是の事である。

入水は只一人だけか、敵と一緒かは書かれていない。『狗張子』の影響も受けているのかも知れないが、魔除(圧倒的に強くて厄に打ち勝つという意味)として又、人相にも「島村蟹」が登場し、後の厄病除の浮世絵に繋がって行くのであろう。

『物類称呼』[32]「鬼蟹(おにがに)」の項に次のように記されている。

摂津にて島むらがにといふ（中略）享禄四年細川高国と三好と攝州に戦ふ　細川の家臣島村何某敵二人を挟んで尼崎浦に没す　故にこれ等の説を後人附會する所也といふ

とあり、『摂州名所図会』[32]「嶋村蟹」の項に次のようにある。

野里川より出るといふ此名義ハ、享禄の頃嶋村左馬助といふ者主君細川高国を援はんとて尼嵜より討出しに、早高国ハ討死と聞より死出の供せんとて四方八面に伐廻り、敵数多討とり最早最期とて敵兵二人と脇挟んで終に入水したり、それより鬼面の蟹出生す、土人嶋村か怨念なりといふ、又後太平記にも見へたり

ここでは『狗張子』『摂陽群談』を踏襲して「島村左馬助」であり、『後太平記』に載っていると記している。

『燕石雑志』[34]の「猿蟹合戦」の項目に次のように記されている。

享禄四年細川高国、三好海雲と戦ふて敗走す。その臣島村貴則苦戦して主を救ひ、遂に安里河に歿して化して蟹になるといへり

『三養雑記』[35]の「平家蟹・島村蟹・武文蟹」の項に次のようにある。

細川武蔵入道高国、法名道水天王寺の近隣にて生害せられけるに、その家人島村弾正左衛貴範(ママ)といふもの、高国にはしり後れける。追つきて、御行へを見奉らんと急ぎけるに、この貴範を待ずして、道水敵に襲はれ、せんかたなく一壺を敵にあやしめられ、遂に見出されて討れけるとなん。この生害を貴範聞て無念におもひ、あたりの敵を縦横無慙に追はらひ、向ふ敵二人、かいつかみて引よせ、川瀬の深みにとび入て、敵味方三人、水底に沉みけり。その霊、化して蟹となると、云々。天王寺より尼崎へ行く道に、野里川といふあり。すなはちその川へ入といへり。島村が霊なれば、俗に島村蟹といふあり。

『摂陽群談』、『書言字考』、『諸国里人談』等にも見えると記している。

次に浮世絵等の絵画に描かれた「島村蟹」について紹介する。

- 『浮世絵嶋村蟹』歌川国芳(江戸末期、大英博物館所蔵)
- 『浮世絵本朝名将鑑嶋村弾正高則』歌川芳員(江戸末期～明治初期、ボストン美術館所蔵)
- 『厄病除鬼面寫真』森光親画(年代不詳)　仮名垣魯文識（金屯道人・江戸末期～明治初期）(国際日本文化研究センター所蔵)写真資料一参照
- 『武勇魁図会』弘化年間　渓斎英泉　寛政二年(一七九〇)～嘉永元年(一八四八)(岡崎市立中央図書館所蔵)　写真資料二参照

右の四点の「島村蟹」は明らかにガザミである。歌川国芳・歌川芳員・森光親・渓斎英泉は『本朝食鑑』[19]をモデルとして描いたのであろう。

以上見たように軍記物、講談、奇談、地誌、土産物、本草書、等々に広く「細川高国家臣」と記され、挙句の果てに浮世絵・厄除、滝沢馬琴の読物に登場するに至っては、完全に「浦上家臣」は消えてしまった。

次に浦上・細川の両方とも無く、ただ「島村蟹」のみを記述した名前と作者を発行年代順に記す。

『毛吹草』[36]「野里川嶋村蟹」の項に次のように記されている。

昔嶋村ト云人此所ニテ合戦シ果テケル其幽霊ト云カニノ甲ニ人貌スハレリ

『諸国里人談』[37]　武文蟹(或島村蟹、平家蟹)、『日本山海名物図会』[38]

「讃岐平家蟹」の項で又嶋村蟹と云うと記されている。

『本草綱目啓蒙』巻四一[39]には次のようにある。

後奈良帝享禄四年、摂津尾崎合戦ノ時、島村弾正左衛門貴則ノ霊此蟹ニ化スト云伝フ。

『桃洞遺筆』[40]には次のように記されている。

後奈良帝の享禄辛卯の年摂津尼ヶ嵜合戦の時島村弾正左衛門貴則の霊此蟹に化すと云ふ皆妄言なり。

四　明治時代以後

島村は明治の文豪森鴎外の『安倍一族』[41]にも登場する。

討手として安倍の屋敷の表門に向かうことになった竹内数馬は、武道の誉れある家に生まれたものである。先祖は細川高国の手に属して、強弓の名を得た島村弾正貴則である。享禄四年に高国が摂津国尼崎に敗れた時、弾正は敵二人を両わきにはさんで海に飛び込んで死んだ。弾正の子市兵衛は河内の八隅家に仕えて一時八隅と称したが、竹内越を領することになって、竹内と改めた。

「強弓の名を得た」と書かれている事で『後太平記』が下敷きになっていることが容易に想像出来る。

現在の自治体史の記載は以下のようであった。まず「大物崩れ」の合戦場から見てみよう。

『新修大阪市史』[42]には次のように記されている。

浦上の宗徒島村貴則は明石勢に組みついたまま野里川の濁流に入した。貴則の憤死した淵から武者の顔をした甲のある蟹が得られたが、誰ということなくその蟹を「島村蟹」と呼んだという。(『足利季世記』[11])

また『尼崎市史』[43]には次のように記されている。

野里川は浦上勢の陣没者で埋められたといい、その数は五千人とも、一万人ともいわれるほどで多かった。浦上勢のなかでも島村貴則の奮戦は語り草となり、それいらい、野里川には恨みのこもった島村蟹が発生したという伝説まで残っている。

どちらも「浦上氏の島村貴則」となっている。次に地元の岡山県を見てみよう。

『岡山県史』[44]には次のように記されている。

村宗の重臣として活躍した島村弾正左衛門貴則は、村宗が細川高国を擁して上洛を企てたときに、村宗に従ってその軍中にあり、「大物崩れ」で討死した。この時、敵方の侍二人を小脇に抱えこんで野里川に跳びこんだが、その怨念で蟹の甲が人面に似た「島村蟹」となったという「平家蟹」もどきの伝説をのこした。

『和気郡史』[45]、『邑久郡史』[46]どちらも『備前軍記』[22]から引用している。邑久郡史には「『陰徳太平記』曰ク」[19]とあるが記載内容から見て『備前軍記』の間違いである。

『岡山市史』[47]は明治三十二年（一八九九年）の『塚本本浦上系図』[48]から引用していて、間違った内容が記載されている。

備前長沼ノ城主島村弾正入道貫阿彌モ村宗ノ臣タリ村宗ト同時ニ打死ス。島村右馬助貴則ハ高国ノ供シテ尼ヶ崎ニ落ケルガ敵迫来リテ高国傷害ナレバ右馬助敵二人脇ニ挟ミテ海中ニ沈ンテ死シタリ。尼ヶ崎ノ者共申ナラハスニハ彼右馬助勇者ニテ死タルカ亡魂蟹ト成テ今其蟹ヲ島村蟹ト云フト也、云々。

ここでは「島村豊後守入道貫阿彌」が討死している。『備前軍記』によると、彼は貴則の子息で、天文年間に活躍し永禄二年（一五五九）に宇喜多直家に殺害されたとされている。「島村蟹」となっているのは細川高国家臣の島村右馬助貴則であり、左馬助は『狗張子』やそれを底本としたと思われる著作物に登場するが、「右馬助」という名前は初出である。地元の岡山市の市史に間違った内容が記されていることは、引用資料が明治三十二年と時代も古く、今のように情報収集が安易ではなく、情報も少なかったからであろう。

隣接する『西宮市史』、『徳島県史』も確認したが、どちらにも「島村蟹」の記述は無かった。

インターネット版「土佐島村系図」[49]『日本氏族大鑑』」に次の様に記してある。

近江國細川氏の武将に島村弾正左衛門高智なるものあり。細川高国に仕へ武勇を以て名を著す。享禄四年(一五三一)六月阿波の三好海雲長基、高國に謀叛して之を殺す。高智は、長基の兵と戦ふも遂に敵に囲まれ、仇二人を脇に挟みて摂津国尼崎の海に身を投じ水没す。のちに高智の怨念は蟹に化生し、土俗に「島村蟹」と云ふ蟹と為す。高智の後裔、初め備前國三石城に居し、のち高島城に遷す。浮田直家に仕ふ。のち土佐に下り秦元親に仕へ浦戸種崎に居す。

これは『土佐名家系譜』[50]を底本として書かれたものであろう。この論文の趣旨のように、間違った情報が次の間違いを引き起こし、それが定着してしまう良い事例である。特に歴史に興味もなく、知識も無い人達が、面白おかしく誰でも簡単に検索し、興味本位で書き込みをし、それが伝染して行くインターネットでは大きな影響があると思われる。

『土佐名家系譜』には次のように記されている。

近江國細川氏上館管領家の部将に、島村弾正左衛門高智なるものあり、勇武を以て聞ゆ、其の後裔土佐に下り、土佐島村氏となる。

近江國住人島村弾正左衛門高智　又貴則（中略）按ずるに、島村姓近畿に多し、『細川両家記』に播磨衆島村弾正あり、又備前浦上家の老臣に島村豊後入道勧阿彌(ママ)あり、之を以て見れば、島村家の最初本國は中国播備間に似たり、（中略）弾正勇にして膂力あり、（中略）敵二人を左右に挟み水に投じ残す、世に傳ふ弾正の霊後化して蟹となる、其の甲人面に似たり、島村蟹と称すと。（以下『斎諧俗談』からの引用として「島村蟹」の記事が続く）（中略）弾正七代裔、初備前國三石城に居り、尋で高島城に移り浮田直家に仕ふ、文禄、天正の頃土佐に下り元親に仕へ浦戸種崎に居る、

享録四年(一五三一)から文禄天正の頃(一五七三～一五九五年)のわずか四〇～六〇年で七代後裔とは無理があり、その間に三石城から高島城に移り、「浮田直家」に仕えた後土佐へ下り、長宗我部元親に仕えたという事も信じ難い。

又『南国市が生んだ土佐勤王党志士島村衛吉関係史料集』[51]も右の『土佐名家系譜』から引用していて、次のように記されている。

先祖は、管領細川氏の近江国の部将島村弾正左衛門高智で勇武を以て聞こえた人物であったという。

ところで前記に「近江国細川氏の武将島村弾正左衛門高智」とあるが、滋賀県の『大津市史』[15]には、「島村蟹」や「島村弾正左衛門高智」の記事は一切無い。そもそも、細川一族は過去も含めて近江を所領した事が無く、[52]細川氏の分国で無い所では、家臣に所領を与えられないため、家臣がいるとは考えられない。又、島村が高国の党に与した近江守護の家臣だとしても、前述した様に「大物崩れ」直前には高国が戴す将軍義晴が近江に逃亡中で、近江守護の六角定頼は将軍義晴の傍にあり、[16]当然大物の合戦には参陣していない。滋賀県の郷土資料で『滋賀県百科事典』[53]を始め複数調べてみたが「島村蟹」に結びつく資料は見つからなかったし、当時の武将で「島村」姓も記載されていない。

最後に一般的な国語辞典等で「島村蟹」を確認してみた結果、次の二つに記載が有った。

『日本国語大辞典』第二版[54]では「島村蟹」の出典を『本朝食艦』と明示して抜粋していて、『日本百科大辞典』第二巻[55]では「きめんがにの異名」とだけの記述であった。

おわりに

「島村蟹」の伝説は一五三一年の「大物崩れ」の後から、摂津地方で語られ始め、言い伝えられて来たのであろう。戦国時代からの大乱が終焉し、

江戸時代になり世情が安定してきた時、大衆の娯楽として「太平記読み」と言われる講談が流行り、それに付随して演題が必要となり『後太平記』『続太平記』『前太平記』『前々太平記』等々が書かれていったと思われる。又、本草書、浄瑠璃、浮世絵、戯作物、地誌類等々が刊行され広く読まれるようになった。

『後太平記』が「島村蟹」を取り上げたとき、島村貴則を「浦上村宗家臣」から「細川高国家臣」へとすり替えた。『後太平記』の著者多々良一竜は、島村貴則は「浦上村宗家臣」だと『足利季世記』等の典拠を調べて承知していたであろう。しかし主君(赤松義村)を殺害して、その子供(政村)を名目主君とし、実権を簒奪した浦上村宗の家臣では、当時、儒学・儒教思想を推し進めていた徳川幕府や諸大名が納得せず[56]、大衆も支持評価をしなかったのではないだろうか。又、浦上村宗が播磨・備前・美作守護職赤松政村を圧倒していたとしても、赤松氏の家臣である村宗の家臣より、天下に知られた管領細川高国の家臣の方が、インパクトがあったのだろう。そして「島村蟹」の説話になるようなキャラクターを、浦上家臣として登場させる事も、無視して除外する事も出来ず、高国家臣としたと推察される。『後太平記』はある意味、大衆文学であり、史実に忠実であるよりも、幕府・諸大名や大衆の支持や評価を優先していると思われる。

『陰徳太平記』の項で述べた様に、長州藩でも『後太平記』と同様に「島村蟹」は浦上家臣の「島村」だと認識していたと思われる。しかし、戦国時代には敵対することの多かった備前に、記録に残るような兵(ツワモノ)がいることを妬ましく思い、細川高国家臣にしたと推察される。

一七世紀後半にかけて、影響力のある『後太平記』や『本朝食鑑』『狗張子』等で、「島村蟹」は細川高国の臣で、両脇に敵二人を抱えて野里川へ飛込んで討死した「島村貴則」ということが定着していった。一八世紀初頭に貝原益軒が『大和本草』の中で「細川高国家臣は誤りで実際は浦上家臣」だと指摘したが、その後は「細川高国家臣」が広く信じられてしまった。

一九世紀に入り当時人気作家の滝沢馬琴が長編の大作『新編金瓶梅』を発表した。又、それらに呼応して「島村蟹」の浮世絵や厄除けの絵札等が世に出ると「浦上家臣」と思っている人は、いなくなってしまっていたのだろう。そして明治の文豪森鴎外の作品『安倍一族』にも細川高国の家臣として登場してしまった。以上の経過状況で「細川高国家臣の島村蟹」は定着したと推察される。

次に飛込んで道連れにした人数や名前については、合戦後約半世紀が経過して『足利季世記』で初めて「島村蟹」が登場するも、その時は記されていない。その時『後太平記』で初めて「敵二人左右の脇に挟んで」と記されて、その後は「二人」と「両脇」が定着していった。確認出来る名前は「貴則」以外では、「左馬助」「貴範」「高則」「貴久」「高智」「右馬助」等である。『陰徳太平記』で「冥途の供」という台詞が入り、『備前軍記』でも使われ、敵の名前「佐田岡平治・吉村十郎」が登場するが、ほとんど広がってはいない。

以上確認して来たが、『後太平記』が非常に大きく影響し、滝沢馬琴で仕上がっている事が理解できた。そして、浮世絵の武者絵や厄払いの絵札等にひろがって、「島村蟹」はワタリガニ科のガザミで、「細川高国家臣の島村弾正左衛門貴則が両脇に敵二人を抱えて野里川(中津川)に飛込んで死んだ」と定着したと推察する。

最後にこの論文について、間違いの指摘や新資料の情報等を頂いて一層の確度が高まれば幸いです。

又、御教授御指導をして頂いた、しらが康義氏や、岡山県立図書館、岡山県立記録資料館の職員の方々及び、写真や地図の資料の掲載を許可して頂いた国際日本文化センター様、岡崎市立中央図書館様及び尼崎市立地域研究史料館様に厚く御礼申し上げます。

〈注〉

(1)「細川高國」(国史大辞典編集委員会編集『国史大辞典』第十二巻、吉川弘文館、二〇〇一年)より抜粋引用
一四八四年～一五三一年　幕府管領。民部少輔・右京太夫・武蔵守・従四位下。法名道水のち常桓。細川政春の子。摂津・丹波・讃岐・土佐守護。管領細川政元の養子三人(他は澄之・澄元)内の一人。政元が暗殺された後、他の養子と戦い、故将軍足利義澄の子亀王丸(義晴)を将軍に擁立し専制権力を確立した。しかし家内で内紛が起き、其の隙に阿波から三好氏が堺に上陸した。高国は義晴を奉じて近江に逃れた。三好元長は義澄の子足利義維を奉じ堺に拠って畿内に指令を発した。高国政権は事実上崩壊し諸国を回って諸大名に支援を要請したが支援が得られなかった。しかし最後に備前の浦上村宗が立ち上がった。高国・村宗連合軍は播磨から摂津に勝ち進み「大物崩れ」の合戦場へと進んでいく。高国は和歌・連歌・書道等の教養を積んだほか、すこぶる多趣味で戦陣の合間にも連歌会・猿楽・犬追物・鷹狩等を催している。

(2)「浦上村宗」(岡山県歴史人物事典編纂委員会編『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社、一九九四年)より抜粋引用
官途は掃部助。浦上宗助の子。浦上則宗死去の後浦上家の家督を継ぐ。主君赤松義村を補佐し、備前・美作・播磨國を実質的に支配していたが、永正十五年(一五一八)頃から義村と不和が表面化するようになり、義村は村宗の居城三石城を攻めたが果たせなかった。逆に村宗は播磨に攻め込み義村を追いつめ、家督を七歳の嫡子政村に譲らせた。しかし義村は再度村宗と対峙するが、村宗はこれを破り和議を成立させたが、室津で義村を暗殺し、その後政村を形式的に推戴した。享録二年(一五二九)中央の政権抗争に破れた細川高国が村宗を頼り、翌年両者は東播磨を制圧し摂津も支配下に入れようとしていた。しかし播磨本国にいて細川晴元と通じた政村が、晴元方の阿波三好軍と対峙していた高国・村宗を攻め村宗は討死し、高国は尼崎で捕らえられ自刃させられた。

(3)「細川晴元」(『国史大辞典』第十二巻)より抜粋引用
一五一四年～一五六三年　右京太夫。法名一清。細川澄元(摂津、丹波、讃岐、土佐守護)の子。永正十七年(一五二〇)父澄元が阿波で没し七歳で家督を継ぐ。大永六年(一五二六)細川高国方の内紛に乗じて三好元長等と阿波で挙兵し故将軍足利義澄の子足利義維と共に堺へ着岸。享録元年高国を京都から駆逐するが、晴元は義維と堺に滞在し義維は堺公方と呼ばれた。「大物崩れ」で高国を滅ぼし、後不和であった元長も除いた。

(4)「三好元長」(徳島新聞社編『別冊　徳島県歴史人物鑑』一九九四年)より抜粋引用
一五〇二年～一五三二年。三好之長の孫。父長秀。長慶の父。弾正少弼・筑前守。山城守護代等に任じられる。永正六年（一五〇九）に父・長秀を失い、永正十七年（一五二〇）、祖父・之長の死後に家督を相続。大永七年（一五二七）二月の桂川の合戦に敗れた高国が将軍・足利義晴と共に近江国に逃れ幕府の政治は事実上機能を停止した。細川晴元・足利義維を擁して阿波から堺に渡り、堺に堺幕府を樹立した。元長が政権の中心人物として活躍したが、摂津の国人衆と対立し享禄二年（一五二九）八月に阿波に帰った。しかし享禄四年（一五三一）二月、細川高国の反撃にあった晴元に援けを求められて堺に入り、六月に摂津国で高国を敗死させた。「大物崩れ」これにより堺幕府に復帰したが、再び摂津人と又、それと結んだ主君晴元とも対立した。一族三好政長や一向一揆を味方につけた晴元に攻められ堺顕本寺で自害。

(5)「赤松政村」(『岡山県歴史人物事典』より抜粋引用)
幼名道祖松丸(さえまつまる)。元服して政佑、後政村、天文十八年(一五四九)将軍足利義晴から従五位下に叙せられ晴政と改名。父赤松義村が浦上村宗に殺害され村宗が播磨・備前・美作の実権を握った後も、形式的に守護職を保持していた。細川高国が村宗を頼り両者は享録三・四年(一五三〇・三一)に東播磨から摂津に攻め入った。享録四年六月四日に高国の敵細川晴元と結んだ政村は摂津で村宗を攻め滅ぼした。

(6)「赤松義村」(『国史大辞典』第十二巻より抜粋引用)
一四七二年～一五二一年　播磨・備前・美作の守護。赤松政則の死後赤松一族から婿養子となり置塩城に居る。その頃浦上村宗が実権を握り、その権勢は守護義村を凌ぐものがあった。このような状況を打開するため、永正十五年(一五一八)から数次に渡り村宗を三石城に攻めたが敗北、同十七年(一五二〇)家督を嫡子政村(後晴政)に譲り剃髪した。翌大永元年(一五二一)村宗との間に和解が出来たが播磨室津に幽閉され殺害された。

(7)「細川両家記」生島宗竹　一五五〇年頃　『群書類従第二〇輯』続群書類従完成会一九二九年　一九五九年改訂版　五九九頁

(8)蛸島直「蟹に化した人間たち(1)」二〇一二年発行、インターネット kiyou.lib.agu.ac.jp/pdf/kiyou_02F/02.../02_27_98.pdf

(9)「二水記」『大日本古記録二水記（四）』東京大学史纂所一九九七年　室町時

代の公家鷲尾隆康の日記
(10)『実隆公記』高橋隆三編纂　続群書類従完成会大洋社　一九五八年発行
(11)「尚通公記」『大日本古記録後法寺關白記』第三巻 東京大学史料編纂所編纂　岩波書店発行　二〇〇七年
(12)「足利季世記」安土桃山時代『改定史籍集覧』第三〇輯　足利季世記巻三高国記　一九〇二年　一七二頁
(13)「赤松盛衰記」『室町軍記 赤松盛衰記―研究と資料―』「赤松盛衰記巻之下天王寺合戦尼崎大物崩之事」国書刊行会発行　矢代和夫・松林靖明・萩原康正・鈴木孝庸編　二二〇頁
作者、成立年等は不明だが、著者の一人の荻原康正氏が『赤松盛衰記』解説で次の様に書いている。「天正期に赤松家の祐筆嵯峨山民部が、書状・古証文等の記録から書き写し、二冊本として成立させていた。（中略）この「天正ノ此」という時期は定阿や実佑の『赤松記』等を考え合わせると、かなり多くの赤松一族に関する記録類が成立していたことを推測され（中略）末裔たちによって編まれた物である」定阿は天正十六年（一五八八）、佑は天正十七年（一五八九）に『赤松記』の伝本がある）。江戸中期に確立したのだろうが、元本は十六世の終わり頃だと思われる。」
(14)若尾政希『「太平記読み」の時代』「近代政治思想史の構想」　平凡社　一九九九年
(15)多々良一竜「後太平記」一六七七年　『物語日本史大系』第六巻　早稲田大学出版部　一九二八年　三四三・四頁
(16)『大津市史』第二巻中世　大津市役所　一九七九年　四五〇頁
(17)浅井了意『狗張子』巻一「島村蟹のこと」一六九二年　現代思潮社　三一頁
(18)岡田渓志「摂陽群談」『大日本地誌大系』第九冊巻第九城ノ部 巻第一六名物土産ノ部　一六九八年大日本地誌大系刊行会　一九一六年　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
(19)人見必大『本朝食鑑』一六九七年　五巻、平凡社、一九八一年、訳注者　島田勇雄　二五頁
(20)香川景継「陰徳太平記」『陰徳太平記一』　米原正義・他、東洋書院　一九八〇年　「巻七天王寺合戦付細川常桓自害事」二三二―二三四頁　元禄八年（一六九五）完成、元禄一一年（一六九八）検閲、宝永三年（一七〇六）出版許可、享保二年（一七一七）出版
(21)橘生斎『西国太平記』　黒川真道編　国史叢書　国立国会図書館　近代デジタルライブラリー
(22)香川正矩「陰徳記」　万治三年（一六六〇）死去　『陰徳記上』　校正米原正義　一九九六年　マツノ書店
(23)土肥経平「備前軍記」　一七七四年　『吉備群書集成』第三輯吉備群書集成刊行会　巻二「浦上村宗摂州出陣並討死事」
(24)平野庸脩『地誌播磨鑑』　一七六二年 姫路市教育委員会社会教育課内播磨史籍刊行会　一九五八年
(25)貝原益軒『大和本草』付録巻二（介類）第二冊三四二頁　一七〇九年　有明書房　校正矢野宗幹　一九七五年
(26)井沢蟠竜『広益俗説弁』　一七一五年　校正白石良夫　平凡社一九八九年　二三〇・二三二頁
(27)小林正甫『重編応仁記』　一七一一年　国文学研資料館高知県立図書館（山内文庫）（二四六八―七）インターネット
(28)滝沢馬琴『新編金瓶梅』下巻第七輯・八輯　一八二一～一八四七年　若山正和編　下田出版　二〇〇九年
(29)寺島良安『和漢三才図会』　一七一二年　訳注島田勇雄・他　平凡社　一九八七年　六五・六六頁
(30)大朏東華「斎諧俗談」　一七五八年『日本随筆大成』第一期巻十　一九二八年　日本随筆大成刊行会
(31)岡白駒（竜洲）『奇談一笑』一七六八年　西田維則編集赤志忠雅堂発行　一八九七年　国立国会図書館デジタルサーチ
(32)越谷吾山『物類称呼』一七七五年　校訂東條操　岩波書店一九四一年
(33)秋里籬島　『摂州名所図会』　巻之三　一七九六～一七九八年臨川書店　三七六頁　一九九六年
(34)滝沢（曲亭）馬琴「燕石雑志」一八一一年『日本随筆大成』二期一九巻　日本随筆大成編集部（株）たんちょう社　一九三〇年
(35)山崎美成「三養雑記」『日本随筆大成』二期十巻　一九二九年 日本随筆大成編集部　（株）たんちょう社　一八四〇年　滝沢馬琴と親交があり、馬琴の影響があると思われる
(36)松江重頼、竹内若『毛吹草』江戸初期の俳諧論書　一六三八年完成一六四五刊行　岩波書店　一九四三年発行　一九七三年第三発行
(37)菊岡沾涼「諸国里人談」一七四三年　『日本随筆大成』二期一四.日本随筆大成 編集部　一九七五年　吉川弘文館

(38)『日本山海名物図会』本文・木村兼葭堂（けんかどう）画・蔀関月（しとみかんげつ）『日本産業史資料一総覧』近代歴史資料集成　一七九七年
(39) 小野蘭山『本草綱目啓蒙四一巻』一八〇三～〇五年平凡社　一九九一年
(40) 小原桃洞（良貴）「桃洞遺筆」一八三三年　『日本産業資料一総覧』　近代歴史資料集成
(41) 森鴎外『阿部一族』一九一三年　岩波書店　二〇〇一年
(42)『新修大阪市史』第二巻　大阪市史編纂委員会　一九九〇年
(43)『尼崎市史』第一巻第三節戦国時代の尼崎　尼崎市役所発行　一九六六年
(44)『岡山県史』　第五巻中世Ⅱ　岡山県史編纂委員会　一九八九年発行　一八六頁
(45)『和気郡史』通史編中巻二　和気郡史刊行会　二〇〇二年　二八二頁
(46)『邑久郡史』上巻　邑久郡史刊行会　高取山城の項　一九五四年発行
(47)『岡山市史』第二巻　浦上村宗の項　岡山市役所発行　一九三八年発行　一九七五年復刻
(48)「塚本本浦上系図」　同右　浦上村宗の項
(49) インターネット版「日本氏族大鑑」　土佐島村系図
www.k2.dion.ne.jp/~tokiwa/keifu/
(50) 寺石正路『土佐名家系譜』高知県教育会　一九四七年発行
「七〇島村氏」の項　国立国会図書館近代ライブラリー　『斎諧俗談』から引用と記している。『斎諧俗談』は『和漢三才図会』を底本としていると思われ、又『和漢三才図会』は『後太平記』又は『本朝食鑑』を情報元にしていると思われる。
(51)『南国市が生んだ土佐勤王党志士島村衛吉関係史料集』高知県南国市教育委員会　高橋史郎編集二〇〇一年発行『土佐名家系譜』から引用のため同じ間違いが記載してある。
(52) 森田恭二『細川幽斎・忠興のすべて』　細川の流れと幽斎の出自、三〇頁
米原正義編集　新人物往来社　二〇〇〇年
細川一族の継続的な分国は、河内・和泉・讃岐・土佐・阿波・淡路・備後の七カ国で後年の応永年間（一三九四～一四二八）以降の細川一族の世襲分国は、摂津・和泉・丹波・讃岐・土佐・阿波・淡路・備中の八カ国で、永享（一四二九～一四四一）末年に三河を加えて一事は分国九カ国を数える。
(53) 滋賀県百科事典刊行会『滋賀県百科事典』大和書房出版、一九八四年
(54)『日本国語大辞典』　第二版第六巻日本国語大辞典第二版編集委員会
小学館二〇〇一
(55)『日本百科大辞典』第二巻　名著普及会　三省堂書店　一九八八
(56)『新大系日本史4政治社会思想史』宮地正人・河内祥輔・藤井譲治・栄沢幸二編者　株式会社山川出版社、二〇一〇年

（しまむら　ゆたか　当館利用者）

写真資料一『疫病除鬼面蟹写真』森光親画　金屯道人識
（国際日本文化研究センター所蔵）

写真資料二『武勇魁図会』渓斎英泉
（岡崎市立中央図書館所蔵）

		浦上村宗家臣		細川高国家臣				浦上・高国双方無	
	年号	島村蟹無し	島村蟹有り	軍記物	本草物	読物・絵画	奇談・旅案内（左馬助）		備考
十六世紀	1531/6	二水記							「大物崩れ」直後
	1550頃	細川両家記							約20年後
	1585頃		足利季世記						約50年後
	1590頃か		赤松盛衰記						元本は16世紀中か
十七世紀	1645							毛吹草	
	1677			後太平記					
	1692						狗張子（左馬助）		
	1697				本朝食鑑				
	1698						摂陽群談（左馬助）		
十八世紀	1709		大和本草						貝原益軒
	1711		重編応仁記						
	1712				和漢三才図会				
	1715		広益俗説弁						益軒と親交有
	1717			陰徳太平記					1695完成1717刊行
	1743							諸国里人談	
	1758					斎諧俗談			和漢三才図会を底本
	1762		播磨鑑						
	1768						奇談一笑		
	1774		備前軍記						
	1775				物類称呼				
	1796						摂州名所図会（左馬助）		
	1797							日本山海名物図会	
十九世紀以降	1803							本草綱目啓蒙	
	1807					島村蟹湊仇討			滝沢馬琴
	1811					燕石雑志			滝沢馬琴
	1833							桃洞遺筆	
	1831～47					新編金瓶梅			滝沢馬琴
	1840					三養雑記			馬琴と親交有
	1860頃					浮世絵　歌川国芳			
	同上					浮世絵　歌川芳員			
	同上					厄病除　金屯道人			
	1913					阿部一族			森鴎外

表１　「大物崩れ」に関する記事一覧